



ろば

百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時30分
 於 東京家政専門学校 2階
 聖書研究会：第1・3水曜 午後7時半
 於 Zoom

連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
 市谷台町14-1-701 賈晶淳 方
 TEL/FAX 03-6273-2930

<http://www.hyakunincho-church.com>

郵便振替口座：00180-8-565379



「いと高きところには栄光、
 神にあれ、
 地には平和、
 御心に適う人にあれ。」

ルカによる福音書 2章 14節



種をまく人

マルコによる福音書四章一一九節

賈 晶淳

今日の聖書はマルコによる福音書におけるイエスの最初のたとえ話です。このたとえ話はマルコだけでなく、マタイやルカによる福音書でも最初のたとえ話になっていますのでイエスの重要な教えとして考えられます。

このたとえ話の中の種とは、種にもいろいろありますが、イスラエルの収穫感謝祭を起源とする過越祭りやペンテコステの時期を考えますと、また古代世界で農耕文化が始まって以来現在までの中近東の人々の主食が小麦であることから小麦の種と考えられます。また蒔かれる時期は種類によって異なると思いますが、祭りの時と合わせると小麦の種を蒔くのは冬が始まる頃で雨期に入る一月中旬、つまり今の時期になります。

本文の続きの一〇節以降の内容には、たとえ話が神の国の秘密を教えるためであることや種を蒔くというのは神の言葉を伝えることであるとの説明があります。しかしながら神の国とは何か、その秘密とは何か、その中身は何かなどについては具体性がなく疑問が残ったままとなります。

イエスのこのたとえ話を聞いていたこの日の聴衆は神の国について分かったのでしょうか。話自体は分かりやすい内容ですが、それと神の国とを結びのは無理があるように見えます。ですから一三節のたとえの説明が始ま

るところはその理由と思われる言葉から始まっています。「このたとえが分からないのか。ではどうしてほかのたとえが理解できるだろうか」、そしてたとえの説明として、「道端のものとは」(一五節)、「石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである」(一六節)と続いています。しかし、これらの内容はイエスの説明というより原始キリスト教の最たる目的、いわゆる福音宣教に重点を置いたものであり、そのためこのたとえ話を最初においたという印象です。八節に良い土地に落ちた種は三〇倍、六〇倍、百倍となると書いてあります。確かにそうであり、ありがたいことです。マルコがこの文章をまとめていた時の原始キリスト教の状況は確かにそのようなものでした。一人のイエスが死に、数多くのキリスト者を得たということです。しかし、この読み方で今日における日本の教会の現状を見てもみますと、教会が種を蒔いているどころか、蒔くべき種を食べているような状況に近いのではないかと思えます。

古代と現代と種の蒔き方は異なるところも多くあると思います。聖書の場合はばら蒔きです。種が落ちた場所を四つの異なる場所に分けて説明していますが、そのように語っている背景にはパレスチナの土地はとても荒れた地で石も多く、夏の間は雨が降らずに乾燥が続いているところです。ですから、この個所はばら蒔きのやり方では蒔かれた種が良い土地だけでなく、芽生え育ち難い場所にも落

ちるリスクは常に持っている」と理解するだけでも十分だと思います。そうではなく原始キリスト教の説明のように、種が落ちた場所を細かく分けて話をしますと、それは何らかの形で評価や差別を呼び起す可能性が十分あると思います。そしてそのような解釈は神の国を教えるよりも、話を聞いている人を傷つけてしまう結果になると思います。結局このたとえでいう神の国とは何なのかに戻ります。

ここでもう一つ、そもそもイエスの前の大勢の聴衆は、或いは今この聖書を読んでいる私たちは、蒔かれた種なのか、種を蒔く人なのかという疑問です。確かに聖書を素直に読みますと蒔かれた種と理解した方が正しいと読めます。しかし、そうだとすれば神の国はいろいろと区別や結果における格差を認めてしまうことになります。この話を聞いている人にはそれぞれが持っている能力やその結果を問うことになりましたがそれでいいのでしょうか。

しかし、種を蒔く人として理解しますと、原始キリスト教が求めていた福音宣教とも繋がりますが、神の国の説明にもつながると思えます。イエスが最初の弟子であるシモン・ペトロとアンドレ兄弟を誘った時に彼らは漁師でした。一章一七節にその誘い文句がありますが、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」とイエスが言ったと書いてあります。決して魚に、漁船にしようとは言っていませんでした。同じようにイエスは人々

お別れ会の「報告

一〇月二五日、坂さんがこの日のために選んで下さったヨシユア記一四章一〇節―一四節を持って話をしました。出エジプトの後カナンに入ったヨシユアとカレブの話です。

カレブはイスラエル建国のモーセとヨシユアに連なる功労者です。カレブは偶然ですが坂さんと同じくこの時八五歳でした。又彼がイスラエルの神、主に従い通したと書かれています。お孫さんたちにお祖父さんはカレブのような人物だったと言いました。三番目の目立たない建国功労者で根性のある方だったと。この国を愛したため、そして家族や仲間を愛したため、戦争に反対し、原発に反対し、多くの平和運動に出掛けられたと。そして、カレブのような信念家であり、その生涯に国や人を愛しただけでなく神を信じ、同じ仲間たちと生涯一貫して歩まれたことを話しました。それはとても難しいことであるがとても大切なことであると。お孫さんたちも納得したようで嬉しかったです。左は礼拝で沖繩のことを話された時の写真です。



坂 敬夫氏

1934. 10. 31-2020. 10. 12

に種を蒔く人になりなさいと話したと思えます。種を蒔く人から、または土壤や蒔き方から考えますと、蒔かれた種が良き土だけでなくいるんなところに落ちるといふ無駄やリスクがあることは当然のこととして受け止めざるをえません。それを承知の上で彼らには蒔いた種の何十倍の収穫を得るといふ希望の話として受け止められます。同時に世の中には種も蒔かないで収穫を期待している人もいます。その批判も込められているかも知れません。このようにたとえ話を理解した時に初めて種まく人が神の国のために働く人というイメージが浮かびます。

ここで種まく人の観点からこのたとえ話のオリジナル解釈を試みました。私自身も驚き興奮し昨晩はあまり眠れませんでした。

まだ種まきの時期を少し前にした農閑期だったと思います。大勢の人々がイエスの言葉を聞こうと集まりました。中には地主の人もいましたが、ほとんどの人は土地を持っていない民衆でした。彼らは土地を持っていたが借金などの理由で土地を手放すしかなかった人、先祖から土地を受け継いでいなかった人など、これらの事情をイエスも知っていました。さて彼らにイエスの種を蒔く人のたとえ話はどのように聞こえたでしょうか。

この前にルツ記を読みました。嗣業の土地をナオミとルツが取り戻す話です。嗣業の土地に対する考えは大変重要な律法の掟です。イエスの話を聞きに来ていた人々の心の中

にもしつかりと根づいていました。猫の額ほどの土地でも種を蒔ける土地があればと思いつながら聞いていたと思います。福音とは神の国の教えであり、その中身はすべての人があつて世ではなくこの世で神と共に生きることの意味します。しかし、当時はローマと領主へのロデが支配している時代でした。土地改革の話はできません。多くの人がそれを願っていてもその話は反逆に連なります。しかし、種を蒔く人のたとえ話ならばどうでしょうか。

ルツ記の話では贖いについて重点的に考えました。キリスト教では贖罪信仰ばかり教えています。聖書では新旧約を通してもっと広い意味での贖いについて教えています。ルツ記は一人の女性であり、寡婦であり、外国人であるルツ、世の中で最たる弱者を象徴するルツの物語は彼女が他人の畑で落ち穂を拾う話で始まっています。そして、最後は彼女が種を蒔く人となったという話で終わっています。その種まきはダビデとイエスという子孫にも連なります。贖いとは失われた主権などを回復することです。そのために旧約では土地の贖いも罪の贖いとほぼ重要なことと教えられます。種を蒔くという意味は贖いの運動に参加することと思えます。百人町教会の五〇年間目指してきた贖いの運動でありまして。その歩みは今の世界で種を蒔く存在として生きることと思えます。それが贖われた人の生き方と思えます。そして、続くべきことと思えます。(二〇二〇年一月八日証詞より)

百人町教会五〇年に寄せて

集会に参加した日を振り返って

池田 啓基

今回発行された『百人町教会の風景Ⅱ』のはじめのページに四〇周年記念会の参加者の写真が掲載されています。私の面識があるのはこの中のごく一部の人ですがこの百人町教会に連なる全てのひとを仲間だと思っていま

す。半世紀の歴史の中でこの教会ではしばしば教会形成についての論議が行われてきましたが今回編集担当者の皆さんの努力により教会の始まりから今までたどってきた道を改めて振り返ることができました。

百人町教会五〇年の歴史の中で私が直接集会に参加したのは名古屋から単身赴任で東京勤務となった一九八二年～一九八九年、一九九三年～一九九八年の二回、約一三年間のことで姉の紹介で参加したのがはじめてでした。初めは礼拝のスタイルが他の教会と全く違って聖書の話はあまりなく社会問題についての話が多かったので面食らってしまいました。話が考えてみれば本来信仰とは日常生活のなかでのものであると考え徐々になじんでいきました。名古屋に月二回帰省する時を除いて日曜礼拝と聖書研究会に参加しました。その後名古屋に戻って二三年ほど経ちますが今でも百人町教会を身近なものに感じています。この親近感はどこから来るのだろうかと思いません。考えてみますと百人町教会の特色はなんと

多くの教会の礼拝は牧師が新約を中心としたイエスの行動を敷衍しそこから教訓を学ぶスタイルが多くて牧師の話に納得しあるいは違和感を持ったとしてもそのまま終わってしまうことが多いのですが、この教会ではイエスの物語を追体験するだけでなく今を生きる者としての現在の意味を考えようとしているという意識が強いと思いました。教会の中だけでなく日常の生活の中で社会とどう関わるのか。牧師を中心としつつもそれに全面的に頼らないで会員も交代で証詞を行い自分の生活を語っていきます。更に話された内容について共食をはさんで応答が行われるので証詞についての理解が深まるとともに問題意識を共有することができています。この取り組みが百人町教会の特色であり会員の連帯感と相互の存在の認識を強めるのに非常に役立っていると思えました。各人が一つの問題を提起すると他の会員から敏感な反応と関心が集まります。そこからキリスト教信仰が単に教会の中だけにとどまることなく社会や歴史と無関係になることを防いで会員の様々な活動につながっています。また礼拝以外にも週報の会員日誌や「ろば」への投稿を通じても会員がどのような生活を送りどのような考えを持っているかが理解できる仕組みがあります。ある時夫婦で日本に来ていたカトリックの宣教師の送別会が礼拝の中で行われたことがありました。私はそれまでその夫婦とは全く面識もなく話したことはなかったのですがその方

が「ろば」に書いた記事に非常に感銘を受けていたので送別の言葉を話させてもらったこともありました。他の人々を仲間と思いに自分の居場所があると感じられる共同体であり、今回の会員アンケートからも多くの人がそう感じているように思います。私が東京勤務を終え再び名古屋で生活するようになってから二〇年以上経っていますがその時間や距離を隔ててもなお自分が百人町教会の会員であるという意識を持つことができるのはこれらの集会を通じた連帯感によるものと考えています。また私が参加した聖書研究会は月二回行われていて、食事を共にしてから行われていました。聖研は聖書の課題を担当のレポーターが説明し更にその時点での問題意識を主体的意見として話しそれについて皆で意見を交わしました。夜遅く終わる聖書研究会から当時住んでいた入間市までは遠かったので聖研の行われていた阿蘇牧師宅に常時泊めていただいていた牧師と更に論議を交わし翌日直接会社へ出社したのは懐かしい思い出となっています。今回のコロナ禍で集会の開催が困難となっていますがZOOMを使って聖研が行われていることを知り久々に参加することができました。その際も長らく話すことになった古くからの参加者とも違和感なく話すことができました。今世界では民主主義の後退、環境破壊、経済格差など様々な問題を抱えています。今後ともそれらに正面から向き合う教会であってほしいと思っています。

Covid-19の中

学ぶこと、変わることに、集うこと

空閑 厚樹

今年の春、新型コロナウイルス拡大予防策として大学での授業は対面ではなくオンラインで実施することが決まりました。学生はもちろん、教員や職員にとっても初めての経験です。試行錯誤の毎日でした。

マイクのスイッチが入っていないことに気付かず五分以上一方的に話してしまったりとを私に伝える方法が分からなかったのです。対面であれば考えられないことです。このような技術的な問題は回数を重ねる毎に対処する術を習得できました。しかし、技術的には対処しえない課題にも気づくことができませんでした。それは、「学ぶ」とはどのような行為かという問いにもつながることです。

このことを考えるきっかけになったのは、春学期（前期）に開講した一年生のゼミの最後の時間でした。入学してから半年間の「学生生活」で感じたこと、気づいたこと、考えたことを自由に語ってもらいました。まず出てきたのが、納得できない、という意見です。

小中学校そして高等学校の授業が再開しているのになぜ大学ではできないのか。対面授業を実施しないことは、政府が打ち出した旅行を推奨する景気刺激策と矛盾するのではないか、等です。この意見に対して、まだ一度もキャンパスで学ぶことができないことへの

不満は理解できる。しかし、持病があったり、高齢の家族と一緒に住んでいる学生にとって登校することは難しい。また、コロナ終息が不完全なうちに対面授業を再開することは無責任だと考える保護者もいる。このような状況では、すべての学生の学習機会を確保することを優先せざるをえないのだ、と回答しました。すると別の学生が、では対面で学ぶことの意味は何だろうかと問いました。

学ぶことが知識や情報の獲得なのであれば、読書をすれば良い、インターネットを探せば分かりやすい説明の学習用動画を多数見つけることができる。それでも何かが足りないと思う。なぜ私たちは大学で、対面で学ぶことをこれほどまでに強く望んでいるのだろうか。

この問いかけをした学生は、自問自答するかのように「ああ、このような一方的な学びでは予想外のことが起きないからだ」とつぶやいて納得したようでした。確かにオンラインの大学の授業は質問もできるし学生同士で議論する機会もある。しかし、講義を受けるという目的をもってインターネットに接続するので、その目的を達成することに意識が向いてしまう、というのです。

私は、これは重要な指摘だと思いました。正解があつて、それに効率的に正確に達することを求める学びの場—たとえば大学受験や資格試験の予備校—では「予想外」のことが起こる事態はなるだけ排除されます。しかし、「大学で学ぶ」ということに学生と教員が望

んでいるのは、学びを通して期せずして予想していなかった気づきを得ることではないかと思つたのです。このような気づきは、学びに関わる者に変化をもたらします。これを「メタノイア」と表現できると指摘した研究者がいます（ピーター・センゲ『学習する組織』）。「メタノイア」は回心と訳されるギリシャ語ですが、回心を「学ぶこと」と理解すると身近に感じられます。学びは、ビジョンによって起こり、実践によって深められ、コミュニケーションの中で育まれる、と彼はいいます。

ビジョンに向かうには、現状から実際に一歩踏み出す必要がある。この「一線を越えること」はこれまでの自分を否定することでもあるので勇気が必要だ。また未知の領域に踏み出すことでもあるので（既知のことであれば学ぶ必要はない）、必ず失敗する。学ぶ者を勇気づけ、失敗をケアする仲間がいること（コミュニティがあること）が、学びにおいて決定的に重要となる。これらのことは事前に準備できることではない。常に予想外の事態が起きる。このような予想外の事態を期待し、楽しみ、深める場が大学だとすれば、集うことができないというのは深刻な事態です。

オンラインでの授業実施を通して、「学ぶこと」について改めて考えました。またこれは「集う」という意味を原語にもつ教会のありかたを考えるヒントにもなると思います。まだ誰も正解を見出していない状況に、わたしたちは現在進行形で取り組んでいます。

コロナ禍雑感

高島 紗綾

「新型コロナウイルス」をニュースで目にするようになったのは、一月。それが生活の場に入ってきたのは、学校が休校となった三月のこと。当初は朝から学童保育が開所され、子どもの行く場所があるという意味で、大きな変化は感じなかった。しかし、その後、市役所の担当課名で、必要な場合を除いて登園を自粛してほしいとの文書が来た。そこには、必要な理由も届け出るようにとも。私も連れも、三月から在宅勤務となったので、家で子どもを見ることは可能だったし、実際そうした。子どもたちにしてみたら、政治決断のもと突然「行く場所」と「やること」がなくなり、さらに友達と遊ぶことも自粛指導され、「ひま」の一言に尽きる状態になった。宿題は、はじめは復習プリントだったが、休校期間が長引くにつれ、新学年の内容のプリントが配られるようになった。しかも、家庭での指導よろしくと。ですが、知っていることと教えられることは別で、互いにイライラと叱責が増した。

私の仕事は、年度初めが最も忙しい上に、三月から五月は、私にとつてしんどい時期なのだ。それは、二〇一一年に東日本大震災、初出産、母を亡くすという出来事があったから。当時、ショックを受けたとは感じていたけど、その中で頑張っていたように思う。でも少し前に、私は、あの時とても傷つき、し

んどかったのだと思った。そして、わからないことだらけで、先が見えない「不安」をばらんだ社会の空気が、あの時と似ていて、自分が削られていくような消耗を覚えた。

いつもと違う形での仕事、そこへ子どもは遊んでほしくて話しかけてくる、普段はやらない昼食の準備に、宿題対応まである。仕事のスペースやお互いが発するイライラ感情、家事分担をめぐって連れとの口論もあったし、その空気を感じた子どもが、私たちから離れ、静かにテレビを見ていたこともあった。家庭の中から余裕が奪われていく、すると居心地が悪くなる。その延長線上をたどると、家は安心できる場所ではなくなってしまう。巢ごもりで密室となった家で、居心地の悪さのしわ寄せを受けるのは、より弱い立場にある人だ。それは社会全体でも同じだろう。

今回のコロナ対策の定額給付金は、世帯まとめでの申請という仕組みだった。我が家は、連れが世帯主で、世帯主からみた私の続き柄は「同居人」、里子は「縁故者」となっている。

申請書が届いたので、早速と思い、同じ世帯なのだから、一緒に申請できるかと思えば、社会的養護の子どもたちは、別に申請が必要だと、市に問い合わせをしたら明らかになった(検索したら総務省のポータルサイトにはあったし、後に東京都からの案内も来たが)。虐待などにより社会的養護となった子どもたちの給付金が、親権者に渡らないようにするためという理由だった。全体にしてみれば、

社会的養護の子ども数は少ないし、里親も少ない。だけど、制度があるのだから、行政として存在を知っているはずなのに、説明がないという場面に会うと、無いものにされていると感じる。他にも全体からしたら少ないけれど、住民票がない人、DV等により住民票住所にいられない人もいる。銀行口座がない人も。でも霞が関や役所庁舎にいる人からは、いないものとされる。とても傷つく。その傷つきが本来の力を奪っていく。問い合わせをするだけでもエネルギーを使うことだから、力が奪われている状態では、声を上げることができない。「困っている」その一言を発することもそうだ。そうして、いないことにされてしまう。

コロナになってもう一つ気になったこと。それは、裁判が停止したこと。私と連れは別姓を選択したことにより、法律婚できない状態が続いている。現在別姓に関する裁判は四件あるが、審議が一時止まってしまった。少数者であってもそれが保障される権利であるならば、そこに光を当てるのが司法の役割だと思うが、コロナによって、大事なことが議論されず、覆い隠されてしまった。

いないことにされ、覆い隠されてしまった陰に何かあるのか。非常時だから見えたことは、実は平時からある問題なのだと思う。そして、より見えにくくなったことはないのか考える必要があると思う。

ネット礼拝について

宮崎 亮子

私にとってネット礼拝は、希望だ。それについて、述べていきたい。石にあたって躓いたら、痛いと呼ぶ。しかし神様は、その石を乗り越えるだけの力を私に与えてくださった。石に躓いて怪我をしてもそこでも教えられることがある。そんな目にあわなかったら、わからなかったこともある。私はこう教えられてきた。それは真実だろうが出口が見つからなくて途方にくれている時、支えてくれるのは、神がいて下さるといふ希望だ。聖書のこの人達も同じように悩んだのだ、そしてそこにも、今ここにも、神様が共にいて働いていて下さるといふ慰めがあればまた元氣を出して生きていける時がくる。

聖書の中の人達が、今を生きる私達と少しも変わりはないことを知れば希望が湧いてくる。自分がそこに映し出されているからだ。自分を発見する糸口の一つであるとも考えている。時代や場所が違ってても、実はその話は大変身近でもあるはずだ。しかも聖書は失敗だらけの話ときている。私達の失敗や問題がすぐに解決するわけではないとしても、しだいに心は賛美へと変わっていく。だから、今のこの時代こそ、教会は何時にもまして、重要なはずだ。だがクリスチャン人口は減り続けている。

地方の教会にいと、いっそうそれを感じる。インターネットからも、希望に繋がる人

が増えることを願う。

さて私がネット礼拝を聞くようになったのは、道子さんが亡くなられた頃からだ。悲しみのうちに、聞くことが習慣になっていった。普段は地元の教会に出席している。十年前に私は宇都宮に引っ越したのだが、「ろば」をその間ずっとご恵贈いただいたおかげで、離れていたという感じはしなかった。コロナで教会は閉じられ人に会うことも減った中で、ネット礼拝に出会えた喜びは大きかった。

次に、希望を与えられるのは発想が転換した時だという例を 挙げたいと思う。すべての牧師は苦心して説教を作り上げてくださっているものだと思うが、多分その苦心の仕方と方向が違うのだ。賈先生のお話は驚きの連続だ。七ヶ月たった今、私の世界感が変わってしまった。固定観念が溶けていくのが自分でもわかるほどだ。

十一月八日の マルコ四章の「種を蒔く人」のたとえ話は、実は苦手な箇所だった。私は良い種でなかったために芽をだせなかったという自責の念にかられるのだ。ところがこれは種の話ではなく、種を蒔く側の人の話だといふのだ。100%芽を出すことなどありえない。

良い畑に蒔いても、芽を出さないリスクはある。何をやるにしてもリスクはつきもの。芽を出さない種があるのは当たり前。現代ならリスク管理の話か。イエスの前にいる聴衆は大半は貧しく、土地を持っていないかった。その貧しい人達に向かって、種を蒔く

人の話は、なぜ土地を手放したのかと棘をさすようなものではないか。イエスが本当に伝えたかったことは何だったのか。話はローマが支配していた時代から、ルツ記へ飛ぶ。嗣業の土地、人は誰でも土地を持つ権利がある。ヨベルの年になるとその権利も戻される。イスラエルの民であれば誰でも土地を持つ権利があり、種も蒔く権利もある。賈い運動に繋がる話なのである。私達も種蒔く人であり続けたいものだ。

そういうふうにして、今まで染み付いた伝統的解釈というものが、鎖をはずすように一つずつ消えていく。聖書が今までよりずっと面白く、リアルに感じることができるようになる。このような光の当て方があるのを知ると、世界観は変わる。発想を変えると生活自体も、生き生きとする。価値観を変えることが可能なことも知った。

最後に不思議な体験について。書道展に出すために、私は秋になってから畳ぐらいの大きさの画仙紙に「譬」と大筆で一字を書いている。「たとえ」と読む。中国東晋の王羲之が四世紀に書いたものを元にしている。大文字というジャンルで数百枚は書く。今回はその制作中にイエスのたとえ話の説教を聞いたので、神様からのプレゼントを頂いたように、制作に熱が入った。キリスト教が生活に根ざしたのになってほしいというのが今の願いである。

図書紹介

『日本語の起源』新版

大野晋著・岩波新書

学生時代に国文学を学んだ事から本書を選びましたが、浅学菲才の身としては荷が重すぎたように感じます。

日本語は文法的にはいわゆる北方アルタイ語的な膠着語の性格を多く保っている。同時に日本語発音の組織の根底には南方のインドネシア、ポリネシアなどの体系があるらしい。

この北と南が日本列島において、どのようにして一体化したのか？

例えば東西日本の方言が対立している事は、国語の常識であるが、長野県、静岡県、西境を境界線とする。東西日本は常に方言的に対立しているだけでなく文化的、形質、人類学的にも種々相違し対立しそれが旧石器時代に迄さかのぼるものであるという。

日本語の母音は a u のような短い母音だけだった。ai とか au のような二つの母音を連続して使う事もなかった。

母音の数は時代によつてかなり変化がある。奈良時代八、平安時代五、室町時代六、現代五である。奈良時代をさかのぼると母音は四個で a i u ö の四個であると推定される。

はたして日本語はどこに起源を持つ言葉なのか？日本の精神を学ぶには萬葉集を先ずひもとく事が大切と著者は言う。

「言語と文化は別々に考えよ」という事は常に言語と文化は別だと言う事ではない。

著者は一九五七年の段階（旧版）で、南方に類縁語を求めべきと考えた。古代日本語では、十三の子音四個の母音しかないのだから、その組合せによつて作られる単語の中で「音と意味の結合」が偶然他の言語の「音と意味の結合」（つまり単語）と同形になっている事もあり得る。

比較言語学の上からは音韻の対応（および文法の対応）が存在している場合二つの言語が古昔に同一の言語であった事は確かである。

著者は比較言語学から日本語とタミル語（使われているのはインドの最南部とスリランカの一部である）の音韻の対応および文法の対応が存在していると言う。

両者が古昔に同一の言葉であったとしてもいつ分離したのか、どこでどうやって分離したのかという間には広い意味での歴史学が参与しなければならぬと言う。

このような大きな命題に簡単に答えを導き出す事はできない。繰返し読む事によつて、著者と一体となつて、日本語の起源を考える楽しみにひたる事が出来ると思う。

疑問を追求する著者の姿勢に心を打たれられた。

なお、私の名前も本当は（をいけ）が正しい表記で W o i k e と発音します。ただ現代の国語では（を）を語頭に使わないと定められているので、日常は已む無く（おいけ）と表記しております。

ろばのせなか

昨年のクリスマスと共に祝った時、新しい年がこのようなになると誰が想像したでしょう。

この一年の間に阿蘇道子さん・赤尾弘子さん・坂敬夫さんが天に旅立たれました。敬愛する信仰の先輩方。コロナ禍で教会員揃つてのお別れは叶いませんでした。残して下さった大切なものをしっかり受け継ぎたいものです。次号に追悼文を掲載させて頂きます。

鎮まることを知らないこのウイルスです。賈先生がいち早く始めて下さったインターネット礼拝とズームによる諸集会によつて、私たちは高田馬場に行かなくても繋がる事が出来ていますが、ネット環境に無い方々の細やかな交流を忘れずにいたいと思います。

異なる信仰をもつ方々との交わりを伝えて下さった恵藤さん。『百人町の風景Ⅱ』への想いを書いて下さった池田さん。コロナ下の試行錯誤から教会の在り方に想いを巡らされた空閑さん。『非常時に見えてきたことは実は平時からの問題』と指摘される高島さん。「インターネット礼拝は希望だ」と言われる宮崎さん。ご自分の専門から真摯に向き合つて図書紹介してくださった尾池さん。それぞれご自分の立つべき位置を揺るがず持つておられて、賈先生の証詞にある「種を蒔く人」の姿がお一人ずつの中に浮かびます。宮崎さんからは、百人町に籍を戻したいとの嬉しいお知らせがあつたそうです。祝ご降誕。

尾池 幸（をいけみゆき）

（泉谷 五十鈴）